

卷頭言

ゴルフ余話

九州大学名誉教授
九州産業大学教養部教授 竹下 健次郎*

1. ゴルフと大学教授

戦後、日本の大学の形態はすっかり変わったが、その使命は依然として二つあり、その第一は教育、第二は研究である。大学が大学校と呼ばれないのは、単なる学校ではなく、研究所を擁しているからであろう。そして、一流格の大学では教育よりも研究に重きが置かれているようである。つまり、研究所の教授は勿論、学部の教授でも研究という使命が課せられているのである。

私がまだ工学部の助教授だった昭和32、3年の頃である。工学部の一角にあがったゴルフ熱は恰も狼火のように燃え上がり、大学教授として最も大切な自律・自治の精神は何処へやら、まことに目を覆うばかりの狂態ぶりであった。私は生来、思ったことは何でも、自分の利害得失を考えずに口外したり、行動する癖がある。「ゴルフ教授は國賊だ！」と、声を大にして叫んだのもその頃であった。折しも、学内の片隅に設置されたゴルフ練習場に熱心に通っていたT教授。その教授室のドアに「只今ゴルフ中！」と書いた大きなビラを貼り付けた。助教授が教授に反抗したらどんな目に会うかは、勿論知らないわけではな

かったが、犯人はすぐに検挙された。「君がゴルフを始めたら承知しないぞ。」と、T教授は顔面蒼白、私はひどく叱られた。「ゴルフってそんなに面白いのですか。」と、私はしぶしぶ引き下がったが、その教授はやがて私の学位論文の審査委員長をしてくださり、私の生涯の恩師となった。

私が「ゴルフってこんなに面白い。」と知ったのは、それから約15年後の昭和48年、52歳のとき。学会の帰途、A社のロス・アンゼルス駐在員の方から「ゴルフクラブを買って帰りませんか。とても安いですよ。」と、強引にゴルフショップに連行されたのがきっかけである。折角持ち帰ったそのクラブは私には長すぎて役に立たなかつたが、一度覚えたゴルフの味は忘れられない。街に出ると、足が独りでにゴルフショップに向いてしまう。何度か買い替えてはいきなり本コースで試してみるので、「お客様！少しほは練習してから来てくださいよ。」と、キャディに叱られたことも度々。腕の方は一向に上達しないが、研究心だけは旺盛である。毎日、裏庭のネット打ちでフォームを改造しては「今度こそ優勝するぞ。」と勇ましく家を出るが、まだ一度も100

*当協会相談役

が切れない。その上、「これだ！」と思った打法をすぐに他人に教えようとするものだから、次男からは「もう、お父さんとのゴルフはご免だ。」と、敬遠されてしまった。ある新聞で「ゴルフとは先生の多いスポーツのこと。ボールを直に飛ばす方法は先生の数だけある。」という北九州・某経済局長の談話を読んだことがあるが、けだし名言である。

ところで、前述の「ゴルフ教授は国賊だ。」という私の持論は、今も昔も変わらない。ある友人から「ゴルフによって研究をスปオイルされる者は眞の研究者ではない。」と決めつけられたが、「それは、君がゴルフをしたことがないから言える言葉だよ。」と、反論したこと覚えている。

ゴルフという遊びは、自分で体験しないと分からぬほど面白い。だから、研究を生命とする大学教授が一たびゴルフを覚えたら、その瞬間から研究者として失格であると私は断言したい。

ノーベル賞の学者の中にゴルフをする人が何%いるか、一度調べてみたいものである。しかし、日本棋院の武宮名人のようなゴルフ人もいるから、この話は学術研究を任務とする大学教授、ならびに会社研究所の主任研究員に限っておくことにしよう。ただ、そろそろ定年も近い老教授にはぜひともゴルフをお薦めしたい。老人にとって足腰を鍛える運動としてはゴルフと弓が最適であることを、私は身を以って体験している今日この頃である。

2. ゴルフと芝生

私は芝生が大好きで、わが家の庭、といつても通路のような狭い空間に一面芝を植えている。ところが、芝という草は他の雑草より

も卑弱いので、こちらがちょっとでも油断すると忽ち滅ぼされてしまう。私は、冬の寒い日でも芝生の上を這いながら、この雑草を一本一本抜き取る苦行を強いられているが、これがまた楽しみである。ゴルフ場に私が誘惑されるもう一つの原因是この芝生のせいかも知れない。テレビでプロゴルファーが無造作に芝（ターフ）を削り取るのを見ると腹が立つ。だから、私はいつまでたってもアイアンが苦手。雲一つない青空のもと、緑一色の芝生のじゅうたんはゴルフ場の生命といって過言ではない。されば、ゴルフ場の管理者も芝生の手入れに必死となるのも当然であろう。管理者としては、芝の中の雑草を一本一本手で抜き取ることはとてもできない相談である。しかし、農薬の無分別な使用は慎んで貰いたい。過剰の農薬は地下水に浸透し、やがては人間の飲料水にまで影響する。かと言って、「農薬を全面的に禁止せよ。」という議論もまた愚の骨頂。農薬のお蔭で稻のニカメイ虫やウンカは影を潜め、わが国のコメの自給自足も可能となっている。また、かつて1845年に英国のアイルランドを襲った「ジャガイモ疫病」のため、百万人の死者が出たという悲惨な記録も忘れてはならない。農薬の適正な使用と使用後の管理こそ、必須の要件なのである。農薬メーカーも、残留性の少ない農薬の開発研究に懸命の努力をしている。医薬にしろ、農薬にしろ、何事も適切な使用法をわきまえ、科学的な管理運営を図ることにより、現代人は一層豊かな文化生活を営むことができるのではあるまい。

私はかつて、初めて西ドイツを見聞して帰国したとき、ちょうど「日本列島改造論」に出くわしたが、日本はドイツよりも面積は広

いのに山ばかりであることに気付き、この論に大いに共鳴した。そして、高い山は水資源の確保に絶対に必要だが、低い山や丘は宅地やゴルフ場にどしどし開発して欲しいと思ったものである。しかし、それにはやはり、環境保全に関する対策と事前の環境アセスメントがこれまた絶対に不可欠な要素であることを痛感している。いさか我田引水で恐縮だが、当協会の存在価値を再認識するとともに、皆様方の一層のご利用をお願いしたい。

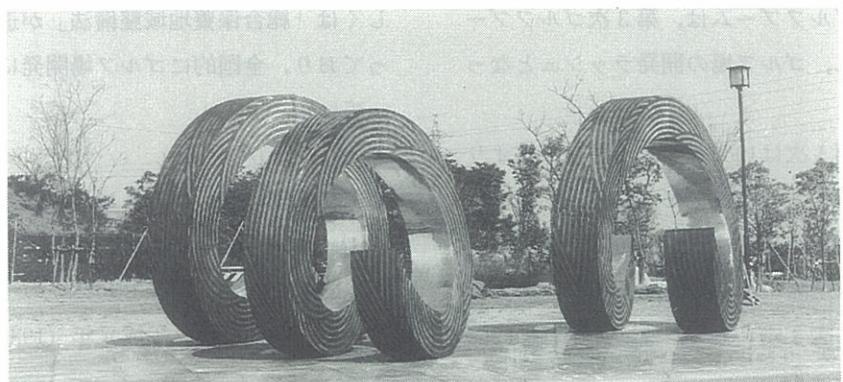
3. ゴルフと人間性

一般に、知人や友人といつても、平素は他人行儀で付き合っている間柄ではその人の性格はなかなか分からぬ。ましてや、眞の人間性については、寝食を共にしたり、お互の利害関係に直面したときでないと全く気付かないことがある。しかし、ゴルフで一緒に18ホールを廻ると、その間にその人の性格が大体呑み込める。自分のミスショットをキャディやパートナーのせいだといわんばかりに不平を言う人。カラ振りを素振りのようにごまかす人。ロスト・ポールを「あった、あつた！」と叫んで、ポケットからこっそり取り

出す人。色んな人がいるものである。中にはうつかり打数を忘れる人もいるが、故意か否かはすぐ分かる。私もよく忘れるので、左腕のカウンターを押しながらプレーしているが、これも押し忘れると無用の長物となる。

昔、私の恩師故君島武男先生はブリヂストンの顧問をしておられ、英國に留学しておられた関係もあって、戦前からゴルフをしておられたそうであるが、当時の私はゴルフというものの存在すら知らなかった。その英國発祥のゴルフは元来、老人紳士のためのスポーツであるといわれる。しかし、今の日本のゴルフを見ていると、まるで若者の贅沢な遊びのようにさえ感ぜられる。私は、心の未熟な若者が勝負に夢中のあまり卑劣なプレーをしていると、自分の大切な親友を失ったり、将来の出世の妨げになりはしないかと心配するが、それも愚かな老婆心であろうか。

最後に、ゴルフ場の経営者にも一言したい。最近、余りにも華美贅沢なゴルフ場が出現しているが、もっと節度を重んじていただきたい。これが、健全なスポーツとしてのゴルフを冒とくし、ひいてはゴルフ亡國論を醸し出す原因ともなるからである。



生成謳歌（白水大池公園） 赤堀光信作